

『オクトパスの神秘： 海の賢者は語る』

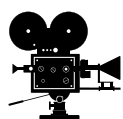
監督：ピッパ・エリッシュ、ジェームズ・リード

2020年／南アフリカ／85分



予告

Netflix 映画
『オクトパスの神秘：海の賢者は語る』
独占配信



社会を旅する シネマ

きっと もっと 近くなる
きっと もっと 知りたくなる

7月21日は海の日。私は昨年春まで石垣島に住んでいた。海でのアクティビティを楽しむ私とは裏腹に、島で育った20代の女性が「小さい頃から海は危ないと言われてきたから」と海遊びをほとんどしないと聞いたときには少し驚いた。だが島ではそう珍しくないという。近いからこそ、海の怖さや危険も知っているのだろう。その海に対する畏敬の念は、海をも観光商材にしている今の社会に必要なものにも感じた。海に「救われた」監督による本作もまた、海がいかに壮大で神秘的か、そして決して「人間のもの」ではないことを伝える。

本作の「主人公」でもある監督は、長年映像制作の仕事をしてきた。だが仕事の重圧と働き詰めの日々に心を病んでしまう。大きな変化が必要だと思ったときに思い出したのが、子ども時代、海で遊んでいた記憶だった。何かしら変化を求めている監督は、子どもの頃遊んだ海へ「帰る」ことにする。

南アフリカのこの海は、低い時、摂氏8～9度まで下がる。場所によっては荒々しく波が立ち、海中には海藻の森が生い茂る。だが監督はなるべく自然の中に溶け込みたいと、酸素ボンベもウェットスーツも使わず、ひたすら潜り続ける。次第に長く潜れるようになっていったときに会ったのがあるタコだった。当初は警戒した様子だったタコも、毎日会いに行くうち警戒を解き、自ら監督の手に吸盤を伸ばすほどに。

心の距離が縮まったように感じ、生態について

夏本番!タコとの交流から 海との「距離感」を見つめ直す

アーヤ藍

も気になって調べていくうち、監督はすっかりタコに恋をしてしまう。「海でも地上でも彼女のことばかり考えていた。常に様子が気になり、会うのが待ちきれない」と少し心配になるほどだ。だがそれほどタコに心を掴まれた監督が撮り、語るタコの生き様は、驚きに満ちている。

まるで監督に抱きつくように腕を伸ばしてくっつく姿や、魚の群れと踊るように戯れる姿には、タコにも感情があるように感じられる。逃げ足の速いカニを捕まえるときに、監督と自分との間で挟み撃ちにしたり、天敵のサメから身を守るために近場の貝殻を吸盤にくっつけてボール状に固まったりと、知恵を使った戦術には目を見開いた。

そして監督の、タコのことを大切に思うからこそ怖がらせないようにと慎重に距離を縮めていく姿や、たとえ大切なタコが天敵のサメに襲われて助けたくなくても、生態系の営みに手を加えてはいけなさと自らを制する姿に、「海（自然界）との距離感のとりかた」についても考えさせられる。

タコをきっかけに監督は撮影意欲を取り戻し、海の世界の中で新たな安心感を見つけていく。監督とともにタコを「見守っている」うちに、こちらの方が大きな自然界の営みに包まれていることに気づく……。そんな作品だ。この夏、海に行く予定がある人もない人も、本作を通じて海と“新たに会って”みてはどうだろうか。

アーヤあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題に関わる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル(株)に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』(春眠舎)。

